

(2)地域営農のシステム化による農業所得の向上

網走農業改良普及センター遠軽支所湧別分室

1. はじめに

湧別町は農業粗生産額の約9割を畜産で占める地域であるが、農産は、てんさい、秋まき小麦を中心とした作付けが行われている。酪農の課題は、①飼養頭数の増加にともなう労働力の不足、②離農の増加にともなう遊休農地の懸念③粗飼料品質の戸別格差とバラツキ、④ほ場面積が小さく作業効率が悪い、⑤乳価の低迷と諸資材の高騰による所得の低下等であった。また、農産部門は①加工用スイートコーン作付け面積の減少により輪作体系の維持が困難、②水田・畑作経営所得安定対策の実施による農業所得の減少、などが予測された。

これらの課題を解決するため、酪農部門では新たな営農支援システム（TMR センター）の構築が急務であり、農産部門では秋まき小麦の前作物確保と所得向上にむけた高収益作物の導入にせまられ、耕畜連携の推進を図る必要があった。

2. 活動の経過（平成17年～21年）

- (1) TMR センター稼働に向け、組織の運営方法や事業計画の作成支援、ほ場台帳整備、TMR 給与マニュアルの徹底を行った。
- (2) TMR センターの柱となるサイレージの品質向上に向け、バンカーの踏圧法など基本技術の見直しと適期収穫を推進した。
- (3) 関係機関で構成する「TMR センターサポートチーム」を作り、TMR 給与経験のない農家を中心に給与指導を行った。
- (4) 生食用スイートコーンの販売に向け「流氷とうもろこし生産組合」を設立し、定量出荷に向けた作型の検討や製品本数の確保に向けた技術支援を行った。
- (5) 生食用スイートコーンの産地化を図るため、パンフレットやポスターの作成支援を行い、消費者へのPR活動を進めた。
- (6) TMR センターの協力を得ながら、畑作農家

と酪農家の交換耕作を推進した。

3. 取り組みの成果

- (1) 新たな営農支援システムとして、既存コントラクタ活用型の TMR センターが設立し、平成18年から飼料の供給を開始した。
- (2) 収穫時期や調製方法を見直した結果、サイレージの栄養価、発酵品質が向上し、貯蔵ロスが大幅に減少（約1/10）した。
- (3) 安定した TMR 飼料の給与が可能となり、乳量や繁殖成績が飛躍的に向上した（図1、2）。戸別規模も平成17年に比べ平成21年では出荷乳量で197 t（144%）増加した。
- (4) TMR センターを利用することで、給餌作業に係わる労働時間を26%削減することができた。搾乳作業への特化が進んだことで、規模拡大や繁殖管理の徹底が可能となった（図3）。
- (5) 「流氷とうもろこし生産組合」を設立し、生食用スイートコーンの導入・定着に取り組んだことで、農業所得の維持と秋まき小麦前作物の面積が確保できた（表1）。
- (6) 畑作農家と TMR センター構成員の間で交換耕作が17haまで行われ、輪作体系の一部として組み込まれるようになった（表2）。
- (7) 対象農家の農業粗生産額は83千万から110千万に増加した。諸材料費が高騰する中で、畜産・農産とも農業所得を維持できた（図4）。

4. 今後の方向

- (1) 現在、TMR センターの評価が認識され、新たに10戸の事業参加を計画している。TMR センター事業の効果を地域へ波及させるため、関係機関と連携しながら支援を行う。
- (2) 生食用スイートコーン単価の確保に向け、市場性を高めるための産地PRを進める。
- (3) 交換耕作を中心とした耕畜連携を推進し、輪作体系の維持と生産性の向上を図る。

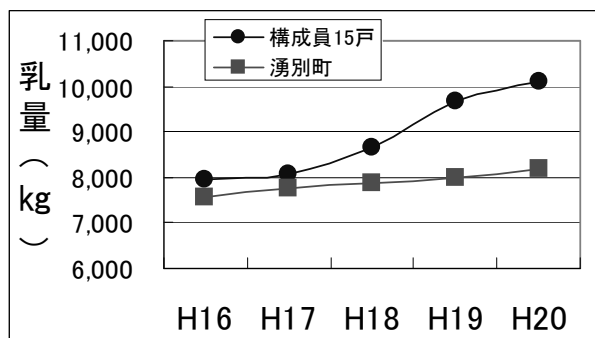


図1 経産牛1頭あたり乳量の変化

表1 生食用スイートコーン生産実績の推移

項目	単位	H18	H19	H20
戸数	戸	6	7	7
作型		3	7	7
出荷期間	日間	16	39	42
面積	ha	4.9	6.3	11.7
出荷本数	本/10a	1,499	1,969	2,169
粗収入	円/10a	120.2	164.5	155.5
生産費	円/10a	90.4	115.3	121.3
所得	円/10a	29.8	49.2	34.3
所得率	%	23.7	29.1	22.0

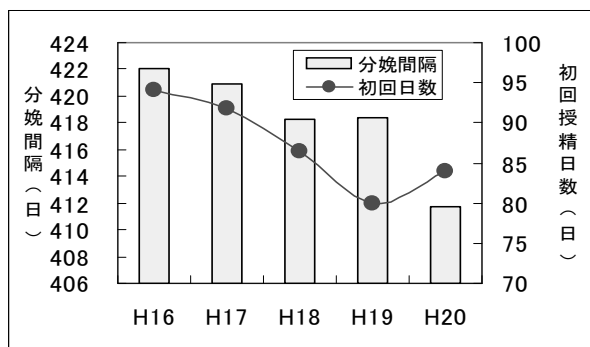


図2 繁殖成績の推移（乳検加入11戸）

表2 交換耕作の取組み

	取組戸数・組数		実施面積
	戸	組	ha
H19年	0	0	0.0
H20年	2	1	4.4
H21年	5	3	16.6

※実施面積は、畑作農家が作付けした面積

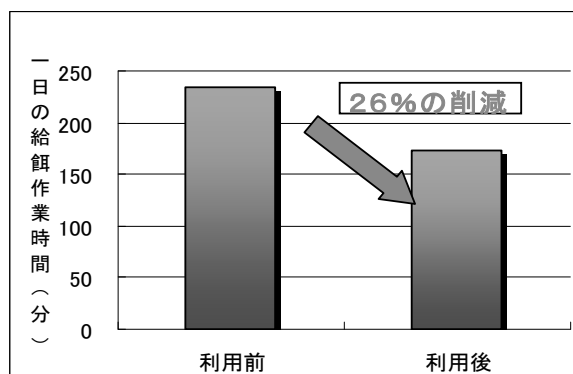


図3 TMR センター利用後の労働変化

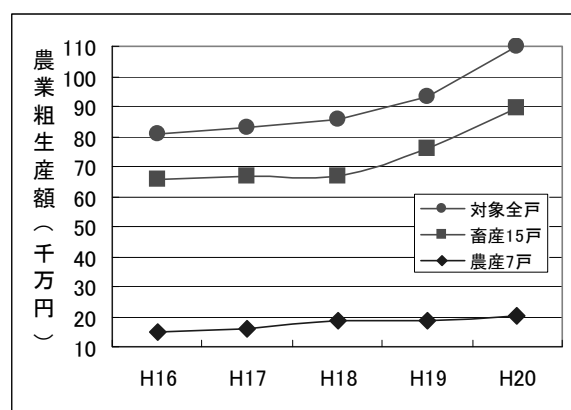


図4 対象農家の農業粗生産額の推移